

# 《安珍清姫の唄》を歌い継ぐ少女たち

鵜野 祐介

## 1. 問いの所在

2020年夏、筆者は『子どもの替え唄と戦争 笠木透のラスト・メッセージ』（子どもの文化研究所）を出版した。6年余りにわたる同書の編集作業を通して実感したのは、それまで筆者自身が藤本浩之輔のいう「子ども達によって習得されたり、創りだされたりした子ども達個有の生活様式（行動と行動の諸結果）であって、子ども達の中に分有され、伝承されているもの」としての「子ども文化」<sup>1)</sup>の典型と考えていた「子どもの替え唄」に、大人たちが予想外の大きな影響を与えているという点だった。しかもその内容は、悪、暴力・残酷、反戦・平和、権力批判・風刺、性愛・春情等の「ヴァナキュラー (vernacular)」な属性を持つものであった。

鳥村恭則によれば「ヴァナキュラー」とは、言語学をはじめとする人文社会科学において「権威ある正統的な言語に対する俗語」を意味するものであり、①支配的権力になじまないもの、②啓蒙主義的な合理性では必ずしも割り切れないもの、③「普遍」「主流」「中心」とされる立場にはなじまないもの、④（支配的権力、啓蒙主義的合理性、普遍主義、主流・中心意識を成立基盤として構築される）公式的な制度からは距離があるもの、以上のいずれか、もしくはその組み合わせとされる。つまり「ヴァナキュラー文化」とは、非権威・反権力・非公式・傍流・周縁・土着・生活密着・口頭伝承などの属性を持つものと言える<sup>2)</sup>。この定義に依拠するなら、「子どもの替え唄」はまさに、大人たちの影響を強く受けつつ創造され継承されてきた「子どものヴァナキュラー文化」であり、特に男の子（少年）が創造や伝承の主な担い手となるものと言ってよい。それでは、女の子（少女）が主な担い手となる「ヴァナキュラー文化」の具体例はないだろうか？ この時に想起されたのが、筆者が1987年に初めて出会い、2020年秋に再会した「安珍清姫の唄」である。

本稿は、その後2年余りにわたる文献調査とフィールドワークを通して、「少女たちは何故この唄を歌い継いできたのか」を考究してきた、その中間報告としての試論である。

## 2. 鳥取県佐治村で聞いた「安珍清姫の唄」

1987年夏、稲田浩二を団長とする鳥取県佐治村（現在の鳥取市佐治）での京都女子大学説話文学研究会口承文芸総合調査に参加した。その中で、同村刈地地区の1922年生まれの女性・下田いわさん（当時65歳）から次のような唄を聞いた。

もおうしもおうしと呼ぶ声に 出てみりゃ女がただひとり もおうしお舟の船頭さん  
この川渡してちょうだいな この川渡すはいとわねど 先ほど行かれた坊さんが  
後から女が来たとても 渡してくれるなと頼まれた なんぼこの川渡さんと  
あなたに迷惑かけりゃせぬ わたしや清姫 蛇じゅうで渡る 着ていた着物を脱ぎ捨てて

ザンブと飛びこむ川の中 あれあれ見やんせ蛇の姿 もう早向うの岸へ着き  
 着いたお寺は長妙寺<sup>(ママ)</sup> どの寺行っても釣鐘は 釣ってあるのにこの寺は  
 おろしてあるとはこりゃ不思議 一卷き巻いてはぎゅっと絞め 二巻き巻いてはぎゅっと絞め  
 三巻き半まで巻いたれば 中の坊さん黒<sup>くろ</sup>仏<sup>ぼとけ</sup> もはや坊さん黒<sup>くろ</sup>仏<sup>ぼとけ</sup> 3)



いわさんは、小学校卒業後間もない頃、紙漉きの作業をしながら年上の女性からこの唄を教わったそうで、それ以来、約50年間一度も歌ったことはないとおっしゃった。にもかかわらず、歌詞のメモも見ないで最後まで全部歌われたことは、筆者にとって大きな驚きだった。また、いわさんはこの唄と結びついた昔話だと言って、以下のように語ってくださった。

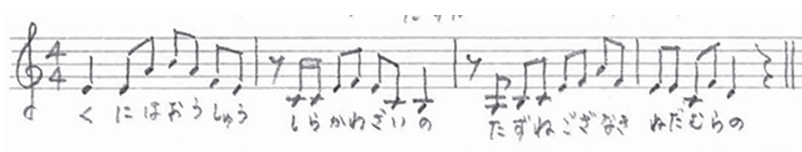
蛙がなあ、坊さんに化けて、それから蛇がなあ、蛇が娘に化けてな、お姫さんに。前は、お寺の鐘を造るっていったら、鐘をするっていったらもう、大勢の人がみな見に来よりましてな。その鐘の所にはもう必ず、蛇が娘さんに化けて出るとかでなあ。もうそりゃ誰よりも一番、器量がいい、姿がいい、一番きれいなのが、その蛇が化けとるわけで、参りよりでしたがな。それで、その蛇が娘さんになって、蛙が坊さんになったのと一緒に、夫婦になって暮らしよったですわ。そしたらある日に、その蛇の髪をこォ（こなふうに）に解きよった。そしたら脇の所から、着物ですさけ、前は、こう脇の下から蛇の鱗が見えたですわ、鱗が。そしたらその坊さんがびっくりして、蛇には怖いでしょう、蛙はもう飲まれるだから。こりゃ大変だっちゅうんでもう逃げたですわ。そしたらもう、その大蛇は追っかけてきて、それを殺してしまわれた、その坊さんを<sup>4)</sup>。

道成寺の鐘にまつわる伝説の断片が最初に語られた後、蛙と蛇がそれぞれ人間の男女に変身し結婚するが、互いの正体が発覚し、逃げ出した蛙を蛇が追いかけて殺すという「動物昔話」の体裁を取る。唄と物語がセットになっていることにより、より鮮明に記憶されることになったに相違ない。それにしても何故この唄はこんなにも深く彼女の脳裏に刻み込まれていたのだろうか。この問いは、以来ずっと筆者の心の中でくすぶり続けていた。

### 3. DVD で聞いた福島県の「安珍清姫ご和讃」

鳥取県佐治村での出会いから30年余り経った2020年夏、偶然この物語唄に再会した。みやぎ民話の会の顧問・小野和子さんから送っていただいた4枚組DVD『福島県奥会津・五十嵐七重の語りを聞く』（みやぎ民話の会2020）の中で、七重さんの姑・五十嵐キヨイさん（当時87歳）が歌った唄として「安珍清姫ご和讃」が紹介されていたのだ。

国は奥州 白河在の たずねござなき 根田村の  
 父は代々 山伏なるが 実は名高き 桃かず殿  
 年に一度の 熊野や参詣 参詣してから こち参る  
 のぼりくだりの 中宿なりき 宿の娘の 清姫は  
 七つ八つから 表に出で、 帰るお客を 待つわいな  
 そうれと知らずに 安珍様は 旅の疲れで たよたよと  
 わらじ脱がせて お風呂に通し 背中流しましょうか お客様  
 七つ八つから 言われたことを 忘れもしまいぞ お客様  
 のろけ話で お風呂を上がり 奥のひと間に 身を休め  
 夕飯すませて 床までのべて 親の寝すむを 待つわいな  
 水のたれるような 黒髪さげて 水の流れるような 愛嬌顔  
 人目忍んで 襖を開けて 忍ぶ姿は 蛇のすがた  
 ここで起こして 恥かくよりも いっそのまま 帰ろうか  
 いくら女の 身じゃからとても ひと目合わなきゃ 帰れない  
 もおし安珍さん お目覚めしゃんせ 逃げる覚悟で 来たわいな  
 安珍夜半に まぎれ発ち 日高川へと いそがるる  
 船頭詳しく 頼み入り 道成寺にと 着きにける  
 あーな嬉しや あの小松原 通りすごして 来たわいな  
 二十二ぐらいの 若山伏に 逢いはすまいか お客様  
 どうせ女じゃ 追いつまるまい わしと一緒に 帰りゃんせ  
 いくら女の 足じゃからとても わたしゃ尋ねて 行くわいな  
 もおし船頭さん 急ぎの船を ひとつ漕いでは くれまいか  
 いくら女の 御用じゃとても 夜の夜中は こされない  
 いくら船頭さんが 船こさなくも わたしゃ泳いで 行くわいな  
 ゆけば間もなく あの日高川 ざぶりと飛びこむ 川の中  
 水を切りわけ 波押しのかけて 泳ぐ姿は 蛇のすがた  
 頃は八月 夜は十五夜の 鬼に姿をあらわして  
 飲まれちゃ大変だと 逃げてゆく 安珍在りかを 見失い  
 大道庭の 大鐘は 縦は七尺 横五尺  
 厚み六寸 この鐘は 無情の鐘と 見受けたり  
 中に安珍 こもりしを 七重に巻き絞め 炎を吹き  
 中で哀れな 安珍様よ 中に哀れな 安珍よ<sup>5)</sup>



キヨイさんは10歳の頃に住んでいた群馬県片品村（福島との県境）でこの唄を友だちから聞き覚えたといい、その後、人前で歌うことはなかったそうだが、嫁の七重さんはこの唄の価値を認めて、事あるごとにキヨイさんに歌って聞かせてほしいと懇願し、また福島県白河市の「安珍清姫ご和讃」保存会にも問い合わせせて加筆修正し、15年かけてこの長大な歌詞を復元したという。

七重さんがこの唄に殊更の関心を持った理由の一つは、彼女自身が蛇の登場する民話に興味を寄せていたからなのかもしれない。このDVDには蛇の登場する昔話が4つも収録されている。「大蛇になった娘おりや」(IT358 蛇女<sup>6)</sup>)、「蛇の目ん玉の昔」(IT224 蛇女房)、「口持だねおなごの話」(IT356A 食わず女房)、「蛇とびつきと蜂の伊勢参り」(IT 対応話型不明)。ご自身も興味を持つ蛇の物語を、姑が唄として記憶していたことに七重さんは奇縁を覚えたのではあるまいか。

七重さんが歌うキヨイさんの「安珍清姫ご和讃」を繰り返し聞きながら、筆者は2つの問い、「東北・北関東の地にこの唄が伝承されていたのは何故か？」そして「蛇の唄や語りが少女によって好んで伝承されたのは何故か？」を反芻していた。こうして、この物語唄をめぐる時空を超えた「巡礼の旅」が始まった。

#### 4. 「道成寺物」の歴史と広がり

まずは時間を遡り、文献に記されたこの物語を確認しておきたい。福井栄一によれば、平安後期・長久年間（1040～44年）に天台宗の僧・鎮源が編んだ『大日本国法華経験記（法華験記）』の巻下第百廿九「紀伊国牟婁郡の悪しき女」が「道成寺説話の祖型を成している」<sup>7)</sup>とされる。その梗概を紹介する。

老僧と年若くして端正な姿の僧が熊野参詣の途中、牟婁郡の道端のある家で宿をとる。主は寡婦で、女は二人の世話を良くした。夜半、女は若い僧の傍に来て「始めて見た時から交わり臥そうと思った」と迫るが、若い僧は拒否する。しかし女は諦めないで、熊野参詣を果たした後、帰り道に家に寄って意に従うと、僧は約束して家を発った。

女は様々な用意を整えて僧たちの帰りを待っていたが一向に現われない。待ちわびて道端の人に尋ねてみると、二人は三日程前にここを通り過ぎたと告げられる。裏切られたことに気付いた女は大いに怒り、寢床に入って籠居し、やがて五尋ばかりの大蛇の姿となって僧を追いかけた。二人の僧はこれを聞き、慌てて道成寺に逃げ込み、事情を説明して、若い僧は鐘の中に隠してもらう。大蛇は寺に着くと、尾で僧を隠した戸の扉を叩き破り、鐘を囲み巻いて尾で竜頭を何時間もたたき続けるが、やがて血の涙を流しながら元来た方へと走り去る。鐘は蛇の毒によって焼かれて炎が燃え盛っていたので、寺の僧たちはしばらく近づくことができなかったが、ようやく水を汲んできて鐘を浸して熱を冷まし、僧の様子を見たところ、ことごとく焼け尽きて、骨も残らず灰と塵だけになっていた。

数日後、道成寺の老僧の夢に大蛇が現れて、自分は鐘の中に籠居した僧であり、例の女の夫となり蛇の姿となっていることを告げ、自力ではこの苦しみから逃れられないので自分たちのために法華経の如来寿量品を書写してほしいと懇願する。老僧は目を覚ましてその通りにし、また僧侶たちを集めて二人の供養を行う。その夜、僧と女が笑顔で夢に現れて、自分たちは邪

道を離れて善趣に向かい、女は切利天に、僧は兜率天に昇ることになったと言って、それぞれ別れて空へと昇っていく。<sup>8)</sup>

「悪女」の話と設定されていること、老僧と若い僧の二人連れであること、若い僧も寡婦である「悪しき女」も名前が特定されていないこと、川を渡る場面はないこと、道成寺で鐘とその中の僧を焼き尽くした後、女が蛇の姿のまま立ち去っていること、若い僧も死後一旦は蛇になるが、法華経の力で二人は成仏すること、以上のような特徴が見られる。

その後、12世紀初頭に成立したとされる『今昔物語集』巻第十四第三「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語」があり、内容は『大日本国法華経験記』とほぼ同じであるが、会話文なども含めて細かく物語っている<sup>9)</sup>。女は「寡やもめにして若き女」とされている。また、話の終わりにはやはり法華経の力を讃美する内容が書かれると共に、「女人ノ悪心ノ猛キ事、既ニ如此シ。此ニ依テ、女近付ク事ヲ仏強ニ誠給フ」と締めくくっており、ここには「執念のために蛇となった女の『愛欲』を忌避する仏教的な女人観の原型」が見えると堤邦彦は指摘する<sup>10)</sup>。

次に、元亨二年（1322年）、臨濟宗の禅僧・虎関師錬の撰による『元亨釈書』巻第十九 願雜十之四 靈柩六「(一) 安珍」には、若い僧の名前を「釈安珍」と言い、「居鞍馬寺」と記される。一方、安珍に懸想する女性はやはり「寡婦」としか記されず、名は不明である<sup>11)</sup>。

そして、16世紀半ばまでに成立したとされる『道成寺縁起絵巻』には、奥州出身の僧（名は不明）、女の方は「紀伊国牟婁郡真砂まなごの清次きよつぐ庄司しょうじと申す人の姫よめ」と記される。前述の堤によれば、「清姫」という名の初出は1742（寛保二）年大坂豊竹座初演の『道成寺現在蛇鱗』においてであるとされるが<sup>12)</sup>、以下には道成寺公式HPの「絵とき」解説文を挙げておく。

- ①延長六年（929）、奥州から熊野詣に来た修行僧・安珍は、真砂庄司の娘・清姫に一目惚れされた。清姫の情熱を断りきれない安珍は、熊野からの帰りに再び立ち寄ることを約束した。
- ②約束の日に安珍は来ない。清姫は旅人の目もかまわず安珍を追い求める。「そこなる女房の気しき御覧候へ」「誠にもあなあな恐ろしの気色や」
- ③やっと安珍に追いついたものの、人違いと言われて清姫は激怒。「おのれはどこどこ迄やるまじきものを」安珍は「南無金剛童子、助け給え」と祈る。
- ④祈りで目がくらんだ清姫、安珍を見失い更に逆上。清姫の怒りと悲哀、「先世にいかなる悪業を作て今生にかかる縁に報らん。南無観世音、此世も後の世もたすけ給へ」
- ⑤日高川に到った安珍は船で渡るが、船頭は清姫を渡そうとしない。遂に一念の毒蛇となって川を渡る。この場面から文楽の「日高川入相花王」ができた。舞台もいよいよ道成寺へ。
- ⑥道成寺に逃げ込んだ安珍をかくまう僧。「その鐘を御堂の内に入れよ、戸を立つべし」女難の珍客に同情しない僧も。「ひきかづきて過ちすな」「ただ置け、これほどのものを」
- ⑦「この蛇、跡を尋ねて当寺に追い到り・・・鐘を巻いて龍頭をくわえ尾をもて叩く。さて三時余り火炎燃え上がり、人近付くべき様なし。」クライマックス「鐘巻」の場面。
- ⑧安珍が焼死、清姫が入水自殺した後、住持は二人が蛇道に転生した夢を見た。法華経供養を営むと、二人が天人の姿で現れ、熊野権現と観音菩薩の化身だった事を明かす。<sup>13)</sup>

その後、安珍清姫の物語は能楽、歌舞伎、文楽などの古典芸能の題材となり、「道成寺物」と呼ばれる演目を生んだ。その数は優に百を超えと言われる<sup>14)</sup>、大衆芸能や祭礼・年中行事など、以下のような3つに大別される様々なジャンルへと広がりを見せながら、今日まで歌い、語り、演じ続けられている<sup>15)</sup>。

- a. 芸能：能、文楽、歌舞伎、琉球組踊、常磐津、長唄、地唄、口説、演劇、映画、歌劇、オペラ、ミュージカル、バレエ、フラメンコ、合唱曲、歌謡曲、和太鼓、落語 etc.
- b. 祭礼・年中行事：神楽、獅子舞、供養念仏踊、盆踊、田植祭、ねぶた祭 etc.
- c. 布教・唱導：絵とき説法、法要

かくも多彩な「道成寺物」の世界は、当然のことながら貴賤の別や年齢の差を超えて数多くの人びとを魅了してきた。そして子どもたち、とりわけ少女たちは、自らの文化としてのわらべうたや子守唄、遊びの中で「道成寺物」を再創造し伝承していったと思われる。また昔話や伝説としての「道成寺物」の熱心な聞き手であった少女たちの中には、数十年後には語り手となって自身の子どもや孫たちにこの物語を手渡そうとする者もいたに違いない。こうして、少女のヴァナキュラー文化としての「安珍清姫の唄」が生成され継承されていったのである。次節では、その具体例を見ていきたい。

## 5. 少女のヴァナキュラー文化としての「安珍清姫の唄」

### (a) 「道成寺」〈手まり唄〉〔和歌山〕

トントンお寺の道成寺 釣鐘下ろいて 身を隠し  
安珍清姫 蛇に化けて 七重ななよに巻かれて 一廻り 一廻り<sup>16)</sup>

——「道成寺物」のわらべうたの中で最も有名なもので、類歌は、和歌山県内はもとより近畿一円、遠くは岩手県上閉伊郡<sup>17)</sup>や鹿児島県屋久島<sup>18)</sup>にも伝承されている。

### (b) 「ここから鐘巻」〈手まり歌〉〔和歌山県日高郡日高町萩原〕

ここから鐘巻 十八丁 六十二段の きざはしを  
上がりつめたら 仁王さん 左に唐金 手水鉢  
右に三階 塔の堂 護摩堂に釈迦堂に 念仏堂  
弁天さんに お稲荷さん 裏にまわれれば 一寸八分の観音さん  
ぼたんざくらに 八重ざくら 七重にまかれて ひとまわり<sup>19)</sup>

——この唄は、蛇になって安珍を追いかける清姫の視点、もしくは道成寺の参拝者の視点から、山門までの石段を上りつめ、伽藍の配置を見わたした時の様子が歌われている。最後の一節は (a) と同じであり、これは外せないフレーズだったようだ。

## (c) 「しょうじ庄屋の清姫は」〈手まり唄?〉[静岡県浜松市]

しょうじ庄屋の清姫は 安珍様にうちほれて 後方<sup>あと</sup>から清姫追ひつひて  
 これ／＼申し船頭衆 此河越さして下さんせ 水の出花で越せませぬ  
 大腹立よ腹立よ 此ま、河へ飛び込んで 浮いたり沈んだり蛇の姿  
 ひとへのおまつへ手を掛けて どうぞ情に明けしやんせ 清姫もう引き上げて  
 安珍様を索したら 鐘のなるまではんまーいた<sup>20)</sup>

——和歌山県田辺市中辺路町真砂には、現在も「庄司屋敷跡」の碑が立っている。

## (d) 「てう山伏や山伏や」〈手まり唄〉[三重県伊勢・松坂地方]

てう山伏や山伏や はじめて桑名へ上るとき 障子や茶屋に休まれて  
 三つになる子を抱きあげた そこでその子の言ふのには 巡礼諸国の巡るとき  
 十年めぐれば十三年 連れてやるのはやすけれど 親子苦勞のかけにみよ  
 木原杉原早や越えて しなの川へとかゝらんせ コウせんとしやせんとしや  
 あとから四人が追ひかける つりがねおろして身をかへす 草鞋の紐がとけて来る  
 一卷きまいて端とめて 二巻巻いて端とめて 二巻半で腰や上げた<sup>21)</sup>

——「山伏」とは安珍を指すと思われるが、話の舞台が桑名になっている。「障子や茶屋」と出典には記されているが、(c) でも見た通り、これはおそらく「庄司屋茶屋」のことであろう。この時、娘はまだ3歳だったが、この山伏に懸想したということか。また「しなの(信濃?)川」は「日高川」の、「あとから四人」は「後から女人」だったと思われる。伝承の過程で歌詞が変化し、意味内容が曖昧・不明となった例であり興味深い。

## (e) 「昔安珍日高の川で」〈子守唄〉[伝承地不詳]

昔安珍 日高の川で 命とられた清姫に  
 日高川には 二いろござる 思ひきる瀬と きらぬ瀬と  
 日高川には 蛇があるそうな 大きな蛇ぢやそな うそぢやそな  
 来いよ来いよと 日高の川で 舟子呼んだのは清姫さんか  
 なぜに此の橋渡られぬ<sup>22)</sup>

——吾郷・真鍋によれば、これは子守唄とされる。記録に残っているのは唄の最初の部分のみであり、子どもが寝付くまで歌い続けることができるのが「いい子守唄」の条件の一つであることを思えば、元の唄の歌詞はこの後もずっと続いたに相違ない。

## (f) 「どふじよじ／＼」〈子取り遊び唄〉

……『尾張童謡集』が、次のように書き記している。

どふじよじ／＼ すつてんから／＼道成寺 といふて、おに後ろの子をとらへよふとする、又後にてはとらへまいとする。唐子のどふじようじして遊べる図を画けるあり。春日井東杉村心入寺什物の内にあり、

とあって、一人の男の子が鬼になり、その前で別の男の子が両手を広げ立ちはだかり、その両手を広げた男の子の前に、四人ほどの子供達が長く一つの列となり、鬼に捕えられまいとしている絵を入れている。右に言う、その寺の什物の図を著者玉晁が写したのであろうか。ともかくこの歌は、子取り遊びで用いられたらしく、むしろその鬼の方を、恐ろしい蛇体の清姫と見立てたのかもしれない。<sup>23)</sup>

——江戸時代後期、尾張名古屋では子取り鬼遊びとして「道成寺」があったことが分る。構図的には蛇体の尻尾を鬼が追いかけて捕まえようとする形で、安珍と清姫の立場が逆転しているが、数珠つなぎになった子を大蛇に見立てるところに子どもたちの関心の的はあったと思われる。

## (g) 「清姫が安珍様に」〈田植え唄〉〔島根県東石見地方〕

清姫が安珍様に恋かけて 恋かけて 我が家をぬけて尋ね行く  
我が家立ち出で 尋ねて急ぐ 清姫が尋ねて行きて日奈田川  
日奈田川渡ると見れば舟止めた すでに清姫大蛇となりて  
清姫が向うに上がりし其の姿 其の姿 如何にも恐ろし大蛇なり  
船頭そりよ見て仰天致す

(中略)

清姫が向ふの寺の鐘に 鐘に七卷半と身を巻いた とけて流れたあの鐘は<sup>24)</sup>

——この唄と次の (h) が歌われた状況は、田植え仕事や盆踊りといった、子どもと大人と一緒に集う場所であり、特に娘たちが伝承の主な担い手として活躍していたと考えられる。つまり、本稿の冒頭に述べた「子ども自身の文化」への大人の影響を反映するもの、より正確には、大人と子ども、そして両者の〈あわい〉に位置する若者(娘)の三者が共同で生成し継承してきたもの、それが「安珍清姫の唄」だったと言えるように思う。

## (h) 「京の宿屋に安珍ありて」〈盆踊口説〉〔高知県香美郡赤岡町〕

京の宿屋に安珍ありて ならびのお茶屋に清姫ありて 小さいときより名づけの妻よ  
それに安珍学にとのぼる 京で一年大阪で二年 明かしくれしが三年三月  
おそいおそいと清姫なげく なげくところへ安珍もどる 顔は美女一姿は蛇体  
おのおそろし女の蛇体 早く逃げねば命がないと 逃げてゆくのが日高の川に……<sup>25)</sup>



——この唄における安珍と清姫の出会いの場は京都であり、安珍は宿屋の息子、清姫は茶屋の娘、二人は幼い時に結婚を約束していたとの設定。学問修業のために安珍は清姫の許を発ち、三年三月経って戻ってくるが、帰りを待ちわびた清姫は半人半蛇の姿になっていたため、安珍は日高川へと逃げていく。前述の福井によれば、室町期成立の『賢学草子』という、以下のような物語がある。近江・三井寺の僧・賢学が京都・清水寺へ参籠した際、同席した美しい娘と恋仲になるが、以前、遠江国橋本の長者屋敷で自分が刺して逃げた女兒だと知り、娘にすべてを打ち明け、別れを告げて立ち去る。しかし娘の恋情は冷めず、賢学を追いかけていき、紀州・日高川を越えて古寺の鐘の中へ逃げ込んだ賢学を、蛇体となった娘は鐘ごと恋の炎で溶かしてしまう<sup>26)</sup>。(h)の盆踊口説には『賢学草子』の影響が見られると言えるかもしれない。

以上のように、道成寺のある和歌山のみならず、静岡、愛知、三重、鳥取、島根、高知、福島(群馬)などさまざまな場所で、少しずつ内容を変えながらも、安珍清姫の物語唄は、遊び(手まり・子取り鬼)唄、子守唄、田植え唄、紙漉き唄、盆踊り唄などとして少女たちによって歌い継がれてきたことが確認された。このように、この物語唄が全国各地に広がっている背景には、前節で紹介した、「道成寺物」として概括される神楽や念仏踊などの大衆芸能や祭礼が、北は青森から南は沖縄まで、全国各地で近年まで継承されてきたことが挙げられる<sup>27)</sup>。けれども特に、安珍の出生地を福島県白河市とする伝承が存在することは何を意味するのだろうか。次節では、現地でのフィールドワークの紹介も合わせながら、この伝承の歴史的背景について考えてみたい。

## 6. 安珍福島出生説の歴史的背景

2022年9月上旬、福島県白河市根田の安珍堂を訪れた。JR白河駅からタクシーで10分ほど行き、谷間に青々とした水田が広がる根田地区に着いた。道路沿いの山裾に「娘道成寺 安珍之里」と記された木製の看板が立ち、入口の道を挟んだ向かいには「安珍生誕之地」と刻まれた大きな石碑が立っていた。急な斜面の石段を10数メートル登って行くと、安珍堂があった。あいにく引き戸が閉まっていたので中を覗くことはできなかったが、この中に安珍像が収められており、毎年3月27日にはこの場所で安珍念仏踊りが奉納されている。また、ここから数百メートル離れた山裾には安珍の墓地もある。

白河歌念仏踊は、江戸時代の中頃から始まったといわれ、五穀豊穡を祈るための踊り、また供養念仏として伝えられてきた。(中略)福島市根田は「道成寺物語」、安珍清姫の伝説で知られる僧・安珍の出生地であり、これにちなんだ歌詞や踊りがあるため、白河歌念仏踊は安珍念仏踊りとも称されている。なお、旧暦二月二七日の安珍忌(現在は三月二七日)には安珍堂の前で、歌と踊りで供養が行われる。昭和二七年(一九五二)に同市天神町にある成田山円養寺を本部とした「奥州白河歌念仏踊振興会」が結成され、多いときには九十数集落が参加し、会員は二千名を超えたという。平成五年(一九九三)、福島県重要無形民俗文化財の指定を受けている。<sup>28)</sup>

それでは、安珍の福島出生説の背景には何があるのだろうか。紀州和歌山と奥州白河を繋ぐ存在とは何者か。柳田国男は『妹の力』（1940）所収の「小野於通」において、蛇神伝承や竜宮伝説の原郷は小野一族が本拠とした近江琵琶湖畔であり、小野氏出身の遊行婦女が伝承の運び手となったとする、以下のような指摘を行う。

琵琶湖南の村々は、自分の知る限りに於て、最も数多くの小野氏口碑の、重なり合つて存在する地域である。三国伝記には小野の神主、小野一万大菩薩の神託を受けて、百濟寺の源重僧都すりはりたうげを磨針すりはり峠たうげに迎へに出た話が既に見え、近世は又木地師の祖神と仰いで居る小野宮惟喬の皇子、小椋をぐらの山中に御入りなされんとして、経過したまふという遺跡が幾ヶ所かにあり、其上に又小野時兼といふ美男、宿縁あつて平木の淵の竜女とかたらひ、別るゝに臨んで玉の筥はこを贈らるといふやうな伝説も、多くの社と寺に残つて居る。此等の奇譚には一つとして孤立したものは無い。語れば又長くなるが、蛇の妻が宝の玉を遺したといふ話などは、少しづつ、形をかへて九州では雲仙岳から、北は奥羽の果にも及び、殊に後者では是を三井寺の鐘の由来と結び付けて説くことになつて居る<sup>29)</sup>。

このような、近江の竜蛇譚の伝承生成とその全国規模の伝播に湖東地域を勢力圏とした小野一族が関与しているという柳田の説に対して、堤邦彦はこれを首肯しつつも、「柳田民俗学の基本的な立場は説話の始源をたどり、その原風景を明らかにする目的のもとに発想されている点も忘れてはならない」<sup>30)</sup>と指摘した上で、「はるかに時代が下がり、もはや小野一族の伝承文化圏とは何らかのかわりをもたなくなった後世の地域社会」における蛇神伝説に対する人びとの受け止め方に重点を移した分析の必要性を説き、「近江一円にあれほど多くの蛇伝承が流伝した真の理由」を、近世以降の諸文献の精査を通して掘り起こそうと試み、以下のような結論を導く。

……北陸道周辺各路傍には、およそ越中を北限に越前・近江を縦貫する竜蛇伝説のベルト地帯が形づくられていたといつても過言ではない。そのような伝承圏の成立と定着に、高僧の蛇身救済を説く真宗唱導僧の活発な布法戦略が少なからず関与したことは、地域社会における宗教伝承と口碑・伝説の有機的なつながりを如実にものがたる興味深いことがらといえるだろう<sup>31)</sup>。

仮名草子作品を通して明らかになる瀬田の竜宮のモチーフは、〈蛇のいる近江〉の水底異郷伝承をいちやく創作文芸の世界に融化させたものとみてよからう。それは、土地の人々の共同体が幾世代にもわたって語り伝えた荒ぶる自然や民俗神への畏敬の念とは性質をたがえる、〈創られた異界〉の登場を意味している。異郷名所の定着と文芸化に果たした近世都市の文芸創作営為の意義は少なくないのである<sup>32)</sup>。

ここに提示された「真宗唱導僧の布法戦略」、「〈蛇のいる近江〉という水底異郷伝承の創作文芸世界への融化」という竜蛇伝説の伝承伝播に関する2つの仮説は、前述した柳田の「小野一族関与」説と合わせて、本稿の主題である「道成寺物」によって奥州白河と紀州和歌山を繋いだ存在の考究にとって重要な示唆を与えてくれることは疑いない。けれどもここでは、もう一つの可能性に

ついて言及しておきたい。それは東北からの熊野参詣であり、その先達としての役割を担った山伏の存在である。

平安中期より皇室・貴族の熊野三社（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社）への参詣が、また鎌倉期以降は東北を含む全国各地からの武士や庶民の参詣が盛んとなった熊野は、その先達を務める山伏が修行する修験道の聖地として知られるが、東北地方もまた出羽三山をはじめ修験道の盛んな地であり、双方を行き来する山伏も少なくなかった。源義経の忠臣・武蔵坊弁慶は一説によると和歌山県田辺市が生誕の地とされる。京都・鞍馬寺で修験僧の教えを受けた義経と五条大橋で出会った弁慶は、比叡山で修業を積んだ山伏のいでたちで描かれる。以後、終生その身を義経に捧げたが、彼らの終焉の地は奥州・衣川だった。

一方、奥州での義経の庇護者であった藤原秀衡にまつわる「秀衡桜」の伝説が、清姫の生誕地とされる中辺路町にある。この秀衡桜は、秀衡が生まれたばかりの子を滝尻の岩屋に残して熊野へ参る途中、ここで杖にしていた桜を地に突き刺し、それが成長したものだという<sup>33)</sup>。秀衡の生年は1122年頃とされ、子授け祈願に熊野参詣をしたのが40歳過ぎであれば1162年頃となり、「道成寺縁起絵巻」に記された安珍の熊野参詣の年とされる929年からは約250年が経っているが、奥州からの熊野参詣が平安時代より盛んであったことの証左と言える。

山伏には宗教者・修行者としての貌の他に、金銀や鉄鉱石などの鉱脈をよむ「山師」の貌もあったようだ。紀州と奥州は共に古来より鉱物資源が豊富であり、山師たちや鉱石採掘、さらにはその売買に従事する人々のネットワークもできていたという。秀衡と義経の面会を取り計らったと『義経記』に記され、奥州で産出される金を京で商う事を生業としたとされる商人・金売吉次にまつわる伝説もその一例だろう<sup>34)</sup>。

以上、「山伏」をキーパーソンとする宗教的・経済的なつながりをも背景として、奥州白河と紀州中辺路の若い男女の悲恋物語が遅くとも江戸中期頃までに成立し、それ以降、都市と地方を問わず幾多の少女たちによって憧れや憐憫とともに歌い継がれていったと言えるのではないだろうか。

## 7. 結びに代えて、 少女にとって「安珍清姫の唄」を歌い継ぐことの意味とは？

前述の堤は、日本の蛇婦譚を説話の内容と目的によって以下の3つのカテゴリーに分けている。①古代アニミズムの神話体系を原郷とする水の精霊の民談話、②中世社会にわきおこった仏教唱導の隆盛を背景に登場した、自然神の仏法への帰順を語る宗教説話群、③近世の小説、芝居、浮世絵などの表現文化に描かれた、恋の懊悩や嫉妬に狂う執着の心根を因として蛇身に変化する女たちの怪異譚。ただし、③においても古い民談の神話的想像力や仏教の説話様式との連続線がすべて断ち切られたわけではないと強調する<sup>35)</sup>。

堤の指摘は、明治以降の人びと、特に鳥取のいわさんや福島のキヨイさんのような僻村に暮らす少女たちにとっての「道成寺物」伝承の意味ないしは存在理由としても妥当するだろう。すなわち、水や金属をはじめとする大自然や動植物に対する驚異や畏敬の念と結びついたアニミズム的世界観や、仏法の力によって天変地異や理不尽な出来事を克服できるとする仏教的世界観をこの物語から受け取る一方で、男女の恋情や嫉妬のもたらす怪異や惨劇を娯楽として味わうことにもなった

と考えられる。実は、いわさんは「安珍清姫の唄」を歌って下さった際、やはり紙漉きをしながら年上の女性から教わったという別の長大な物語唄、「生徒殺しの唄」を同じ旋律で歌われた。

じゅうこう二つの麗美人 人と生まれし学問を 生徒に教える教員が  
 恋に心を奪われて 生徒殺しの事件をば 聞くも涙の種となる  
 所は名高き静岡の 市内に近き島田校 言う子は島田の女学生  
 歳はようやく一四歳 その名は川上みつ子とて お顔にゃゆかしき薄化粧  
 髪は利発のさんこ巻き 薄紫のリボンつけ えび茶袴にゴムの靴  
 お通いなさるはみつ子さん これに思いをかけたのは おんなじ学校のご先生  
 歳は当年二十四歳 その名は三村<sup>みつむら</sup>小三郎 みつ子の器量や愛嬌や  
 粹な姿に目をつけて 一人くよくよ恋の闇 末は夫婦で暮らさんと  
 度胸定めし三村は みつ子の部屋へと忍び込み 見ればみつ子は友達と  
 四、五人連れて集まりて すごろく盤にうち向い 試験話をいたさんと  
 これ幸いと三村は 「みつ子さん」と名を呼べば 見れば三村ご先生  
 「夜中<sup>やちゆう</sup>に御用とは何事ぞ」 聞いて三村はあざ笑い 「もはや試験も来たなれば  
 地理や歴史や算術や 国語の練習いたさんと」 うまくみつ子連れ出し  
 うちを出るときゃしゅでの山 そよそよ吹く風無常の風 雨だれ滴は三途河  
 これが我が家の暇乞い 慣れにし道をいそいそと もはや行き来の人も無く  
 これ幸いと三村は 自分の部屋にと連れ込んで 地理や歴史や算術や  
 国語の練習あとにして 「先日よりも今日までの 送りし文のご返答  
 どうして下さるみつ子さん」 みつ子は大いに驚いて 子供心に逃げ出さば  
 逃がしぢゃならんと引き止めて 「たとえ女房にならんとて、天の顔立ちしておくれ」  
 「いくら三村ご先生 あなたは学校のご教員 生徒に教育つける方  
 このこと生徒に知れたなら あなたの御身は害となり わたしゃ方々に勘当され  
 せめて学校卒業まで 待ってちょうだいご先生」「これほど言うのに聞き分けぬ  
 かわいさあまって憎らしい」 ポケットよりも取り出し 肺に突き刺す九寸五分  
 うまくみつ子突き殺し 自分も用意の毒をのみ もはやえんしはもはんなる<sup>36)</sup>

これは明治時代に起きた実話に基づく唄だといわさんは解説された。テレビはもちろんのこと、映画もラジオも雑誌も身近にはなかったという昭和初期の寒村で長時間の紙漉き作業に勤しむ少女たちにとって、現実の日常世界から超絶した、エロティックで残酷かつインモラルな物語世界である「安珍清姫の唄」や「生徒殺しの唄」を歌うことは、カタルシスすなわち情念の昇華を体感できる絶好の機会だったに相違ない。そしてまた、同じ作業場で働く年長の女性から習い覚えたということは、こうしたヴァナキュラー文化が女性たちの間で口承によって世代間伝達されていたことを意味していよう。

少女たちは、アニミズム的世界観や仏教的世界観を感じ取ると同時に、大人の世界への憧れと恐れを綯い交ぜにしながらエロティックで残酷かつインモラルな物語唄を歌い、それによってカタルシスを覚えることができた——。これが、少女たちにとって「安珍清姫の唄」を歌い継ぐことの意

味とは何かに対する、現時点での「中間答申」である。これからも「巡礼の旅」は続くだろう。

さらに、明治から昭和初期にかけて少女たちによって手まり唄やお手玉唄として全国的に歌われた、やはりエロティックで残酷かつインモラルな物語唄「巡礼お鶴」「不如帰」「一かけ二かけ（西郷隆盛の娘の唄）」等についても、起源と歴史の変遷、地域的分布と差異、伝承・伝播の様態、伝承者の心理等に関して、同様の視点から追究していくことを期している。

## 注

- 1) 藤本浩之輔「子ども文化論序説：遊びの文化論的研究」、『京都大学教育学部紀要』31号、1985：5
- 2) 島村恭則『みんなの民俗学 ヴァナキュラーってなんだ?』平凡社新書 2020：30-32より要約
- 3) 稲田浩二・鶴野祐介『佐治の民話と唄・遊び』手帖舎 1989：339-340
- 4) 同上 67-68
- 5) 小野和子さんからコピーをいただいた五十嵐七重さん直筆の歌詞帳に基づく。
- 6) ITは稲田浩二『日本昔話通観 第28巻 日本昔話タイプインデックス』同朋舎出版 1988年の略号。
- 7) 福井栄一『蛇と女と鐘』技報堂出版 2012：192
- 8) 井上光貞・大曾根章介校注『日本思想大系 7 往生伝 法華験記』岩波書店 1974：568-569
- 9) 『新編日本古典文学全集 35 今昔物語集 1』小学館 1999年。また福井（2012）も参照。
- 10) 堤邦彦『女人蛇体 一偏愛の江戸怪談史』角川書店 2006：159
- 11) 『続神道大系 論説編 元亨釈書和解（三）』神道大系編纂会 2005年。また福井（2012）も参照。
- 12) 堤（2006）181
- 13) 「道成寺」公式 HP <http://www.dojoji.com/>
- 14) 同 HP より。 <http://www.dojoji.com/kabuki/index.html>
- 15) 同 HP 「道成寺物一覧」参照。 <http://www.dojoji.com/kabuki/dojojimono.pdf>
- 16) 町田嘉章・浅野建二『わらべうた』岩波文庫 1962：39
- 17) 「とんとんお寺の道成寺／釣鐘落して身を隠し／安珍清姫蛇に化けて／手毬しよ」『岩手県史』民俗篇、吾郷寅之進・真鍋昌弘『わらべうた』桜楓社 1976：91-92
- 18) 「道成寺のどーみょーが／釣鐘おろして身をかくし／安珍清姫 蛇に化けサツサ」（『南日本わらべうた風土記』、吾郷・真鍋 1976：91-92
- 19) 中西包夫『日本わらべ歌全集 17 下 和歌山のわらべ歌』柳原書店 1991：61
- 20) 『風俗画報』明治三十一年六月号、吾郷・真鍋 1976：94より引用
- 21) 『三重県民謡集わらべ唄』、同上 94
- 22) 『歌謡集成』、同上 92
- 23) 同上 93
- 24) 三上永人『東石見田唄集』、同上 96
- 25) 『日本民謡大観』四国篇、同上 96-97
- 26) 福井 2012：223-224
- 27) 青森県下北郡東通村：下北能舞「金巻」、岩手県稗貫郡大迫町：大償神楽・岳神楽、秋田県由利本荘市鳥海町：本海番楽「金巻」「鐘巻」「安珍清姫」、山形県鶴岡市：黒川能、福島県白河市根田「安珍歌念仏」、群馬県吾妻郡高山村：尻高人形「日高川入相花桜」、埼玉県行田市：下中条の獅子舞、埼玉県入間郡三芳町：竹間沢車人形「入相桜恋闇路 日高川渡し場の段」、東京都八王子市：八王子車人形「日高川入相花王」、愛知県知立市：知立山車祭、三重県亀山市：西野鼓踊・阿坂鼓踊・小田雨乞踊、京都市：壬生狂言、和歌山県田辺市中辺路町真砂：清姫踊、広島県山県郡北広島町：大塚神楽、大分県中津市北原人形芝居、沖縄県：琉球組踊「執心鐘入」。出典：『道成寺絵とき本』宗教法人道成寺、出版年不詳：69。
- 28) Web 版新纂浄土宗大辞典「安珍念仏踊り」2018年3月30日最終更新  
<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E5%AE%89%E7%8F%8D%E5%BF%B5%E4%BB%8F%E8%B8%8A%E3%82%8A>
- 29) 柳田国男「小野於通」（『妹の力』（1940）所収）、『柳田国男全集 11』筑摩書房 1998：432-433より引用。
- 30) 堤 2006：66
- 31) 同上 72
- 32) 同上 84-85

- 33) 出典：中辺路町観光協会 HP。詳しくは以下の通り。「奥州平泉の藤原秀衡は40歳を過ぎても子どもに恵まれないので、熊野権現へ17日の参籠をして願をかけた。その願はかなえられて妻はみごもり月日は流れて7ヶ月となった。熊野権現のあらたかな靈験で懐妊したので、そのお礼詣りにと、妻と共に旅立ち永の旅路を重ねようやく滝尻に着き、ここの王子社に参詣したところ未だ臨月に達しないうちに産気を催し、不思議にも五大王子が現れて「この山上に胎内くぐりとて大きな岩屋がある。汝只今いそぎそこで産されよその子はそこに預けて熊野へ参詣せよ」とのお告げがあった。そこで岩屋で子どもを生みそのまま寝かせておき熊野へと急いだ。途中野中で手折りにした桜の杖を地にさし「参詣の帰り途この杖に花が咲いていたら無事なり」と立願して本宮へ急ぎ、熊野大権現を拝礼し、すぐ下向して野中に着き桜の杖を見ると、花はいきいきとして香盛んであった。さてはわが子も無事であろうと滝尻の岩屋へと急いでみると、子どもは一匹の狼に守られ岩から白くしたたる乳を飲んで丸々とこえていた（この子が後の藤原忠衡である）。これこそ神のお救い、何とかしてご恩を報いたいものと後に七堂伽藍を造営して諸経や武具を堂中に納めた。これを秀衡堂とも七堂伽藍とも言ったが、天正の兵乱にこわされ今では記録さえ残っていない。秀衡はその伽藍の維持費として黄金を壺に入れ近くに埋めたと伝えられている。この岩屋は乳岩と呼ばれ深さ6メートル横4メートルぐらいであり、腹這いでくぐり抜けることができる。乳の少ない婦人が詣るとご利益があるという。また秀衡がさしたと言う桜は「野中の秀衡桜」といわれ現在のは二代目か三代目らしいが、桜のそばに「奥州秀衡二代の桜」と刻まれた石柱が当時を物語るように立っている」。
- 34) 福島県白河市白坂皮籠には金売吉次のものと伝えられる墓がある。
- 35) 堤 2006：17-18
- 36) 稲田・鶴野 1989：340-341

## 参考文献

- 吾郷寅之進・真鍋昌弘『わらべうた』桜楓社 1976年
- 稲田浩二『日本昔話通観 第28巻 日本昔話タイプインデックス』同朋舎出版 1988年
- 稲田浩二・鶴野祐介『佐治の民話と唄・遊び』手帖舎 1989年
- 井上光貞・大曾根章介校注『日本思想大系7 往生伝 法華験記』岩波書店 1974年
- 鶴野祐介『子どもの替え唄と戦争 笠木透のラスト・メッセージ』子どもの文化研究所 2020年
- 島村恭則『みんなの民俗学 ヴァナキュラーってなんだ?』平凡社新書 2020年
- 曾根正人校注『続神道大系 論説編』元亨釈書和解(三)、神道大系編纂会 2005年
- 堤邦彦『女人蛇体 一偏愛の江戸怪談史一』角川書店 2006年
- 『道成寺絵とき本』宗教法人道成寺、出版年不詳
- 中西包夫『日本わらべ歌全集 17下 和歌山のわらべ歌』柳原書店 1991年
- 林雅彦「道成寺説話の展開 一男と女の愛憎物語一」、林雅彦編『絵解きと伝承そして文学 一林雅彦教授古稀・退職記念論文集一』方丈堂出版 2016年所収
- 福井栄一『蛇と女と鐘』技報堂出版 2012年
- 藤本浩之輔「子ども文化論序説：遊びの文化論的研究」、『京都大学教育学部紀要』31号、1985年
- 町田嘉章・浅野建二『わらべうた』岩波文庫 1962年
- 馬淵和夫・国東文磨・稲垣泰一校注『新編日本古典文学全集 35 今昔物語集1』小学館 1999年
- みやぎ民話の会『4枚組DVD 福島県奥会津・五十嵐七重の語りを聞く』みやぎ民話の会 2020年
- 『柳田國男全集 11』筑摩書房 1998年

(本学文学部教授)

## Girls Succeeding to ‘Songs of Anchin-Kiyohime’

by

Yusuke Uno

‘Anchin-Kiyohime no Uta (Songs of Anchin-Kiyohime)’, sung in every region of Japan until the beginning of the Showa era as lullabies, children’s songs, labor songs or mid-summer Bon Festival songs, are considered as a typical example of “a vernacular culture for girls”. This paper discusses the origin and the historical transformation of the songs, their regional variations and differences, and the aspect of their tradition and transmission, based on literary research and fieldwork. In particular, I ask the following two questions: (1) What is the connection between Fukushima Prefecture, the birthplace of Anchin, and Wakayama Prefecture, the birthplace of Kiyohime? and (2) What did it mean to the girls to continue singing ‘Songs of Anchin-Kiyohime’.

In conclusion, concerning the first question I will introduce three previous theories such as “the involvement of the Ono Family”, “the missionary strategies of the Jodo Shinshu priests” and “the integration of the tradition of the Ohmi as another under-lake world where serpents live, and creative literature in the Edo era”. Meanwhile I will point out the importance of Yamabushi as not only Buddhist monks, but as also involved in the mining and distribution industries. In respect to the second question, I will offer the hypothesis that the girls repeatedly sang certain erotic, cruel and immoral narrative songs such as ‘Songs of Anchin-Kiyohime’ which could not only touch the world of animism and Buddhism, but also gain an emotional catharsis.